

逆接表現で短所も好印象に

- 談話焦点が人物の好ましさに及ぼす効果 -

井関龍太・菊地正

(筑波大学人間総合科学研究科)

Key Words: 逆接表現, 談話焦点, 印象形成

言語理解において、談話焦点にあるエンティティは、照応解決や量化処理の際に、言及されている対象として解釈されやすいことが知られている (Sanford & Garrod, 1998; Sanford et al., 2002)。一方、焦点に入っていない情報がどのような状態にあるのかは明確でない。Baker & Wagner (1987) によると、複文の従属節に含まれる情報は、主節に含まれる情報に比べて、その内容が誤っていることに気づかれにくい。複文では、主節に焦点が当たり、従属節には焦点が当たらないと考えられる。そこで、この結果は非焦点情報が受け手に考慮されないことを示唆している。しかし、この知見からは、正しさの評価の段階で非焦点情報に注意を向けられなかったのか、非焦点情報にも注意は向けられていたが評価に反映されなかったのかは明らかでない。

Baker & Wagner (1987) では、内容の正誤が各節で独立に成立していたため、評価の段階で非焦点情報が無視されたのか、参照はしたが影響力が弱まったのかは区別できなかった。そこで、本研究では、非焦点情報も含めた総合的な判断を行ってもらうため、文全体で言及された人物の好ましさの評価を求める。好ましさは、ポジティブとネガティブの両方向について検討する。焦点を操作するため、逆接と順接の複文を用いて、好ましさを左右する性格特性語の現れる節を操作する。

【方 法】

実験参加者: 24 名の大学生 (男性 7 名, 女性 17 名)
要因計画: 2 (特性語: ポジティブ・ネガティブ) × 2 (接続法: 逆接・順接) × 2 (特性語の位置: 先行・後続) の被験者内計画。
材料: 性格特性語の評定データ (青木, 1971) から、望ましさの高い語 (以下、ポジティブ語)、望ましさが中程度の語 (中立語)、望ましさの低い語 (ネガティブ語) を 56 語ずつ選んだ。3 種類の語をそれぞれ 1 つずつ含む 56 の組を作った。各組の語から、8 つの条件に合致する文を構成した (Table 1 を参照)。文は逆接の場合には、“A は [特性語 1] だが、[特性語 2] だ。”という形式であり、順接の場合には、“A は [特性語 1] で、[特性語 2] だ。”という形式であった。A の部分には、男性の名前と女性の名前を半数ずつ用いた (“和也”, “優子” など)。各文の特性語は、一方は常に感情価を有する語であり (ポジティブ語かネガティブ語)、他方は常に中立語であった。特性語の位置が“先行”の条件では、[特性語 1] の部分に感情価を有する語を用いて、[特性語 2] の部分には中立語を用いた。“後続”の条件では、その逆の割り当てを用いた。各条件の文が等しい回数現れるように冊子を作った。各冊子は 56 の文を含んだ。56 組の各材料がどの条件に当たるかをカウンターバランスするため 8 種類の冊子を作成し、3 名ずつの実験参加者に無作為に割り当てた。
手続き: 冊子を配布し、各文を読んでそれぞれの文で述べられている人物についてどのくらい好ましいと感じるかを 5 段階で評価してもらった (1 = まったく好ましくない ~ 5 = とても好ましい)。

【結果と考察】

各条件における平均評定値を Figure 1 に示した。2 (特性語) × 2 (接続法) × 2 (特性語の位置) の分散分析を行ったところ、3 要因の交互作用が有意であった ($F_1(1, 23) = 9.87, p < .01$; $F_2(1, 55) = 9.46, p < .01$)。そこで、各特性語について 2 要因の分散分析を行った。

ネガティブ語について、2 (接続法) × 2 (特性語の位置) の

分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ($F_1(1, 23) = 7.30, p < .05$; $F_2(1, 55) = 9.87, p < .01$)。単純主効果の検定によると、先行 - 逆接条件では、先行 - 順接条件よりも、人物の好ましさが有意に高く評価された ($F_1(1, 23) = 18.10, p < .01$; $F_2(1, 55) = 25.66, p < .01$)。したがって、逆接表現は、順接表現に比べ、従属節の含むネガティブ語の評価をより好ましいものに変えた。また、先行 - 逆接条件で述べられた人物は、後続 - 逆接条件のそれよりも好ましいと評価された ($F_1(1, 23) = 21.37, p < .01$; $F_2(1, 55) = 27.12, p < .01$)。このことから、ネガティブ語が主節でなく、従属節に含まれる場合にのみ評価の変容が生じることがわかる。以上のことから、焦点の効果は、ネガティブな性格特性の評価を和らげることが明らかになった。

ここで、談話焦点の効果が無視されるものであると仮定すると、逆接表現で主節にネガティブ語がある条件 (後続 - 逆接) は、同じ内容だが主節に区別のない順接表現の条件 (後続 - 順接) よりも評価が低くなるはずである。しかし、評定値の差の方向はその逆を示唆している ($F_1(1, 23) = 3.09, p < .10$; $F_2(1, 55) = 1.47, ns$)。そこで、非焦点情報は単純に無視されているとは言えず、評価の際の影響のみが小さく考えられる。

ポジティブ語についても同様の 2 要因の分散分析を行った。位置の主効果のみが有意であった ($F_1(1, 23) = 22.53, p < .01$; $F_2(1, 55) = 11.55, p < .01$)。交互作用は有意でなかった ($F_1(1, 23) = 2.85$; $F_2(1, 55) = 2.75$)。そこで、ネガティブ語の場合とは異なり、ポジティブ語では焦点の効果は見られなかった。このことは、ネガティブバイアスの観点から説明できるかもしれない。

Table 1 実験に用いた材料の例

【ポジティブ語】

先行 - 逆接: 和也はがまん強いが、欲がない。

先行 - 順接: 和也はがまん強く、欲がない。

後続 - 逆接: 和也は欲がないが、がまん強い。

後続 - 順接: 和也は欲がなく、がまん強い。

【ネガティブ語】

先行 - 逆接: 和也は知ったかぶりをするが、欲がない。

先行 - 順接: 和也は知ったかぶりをし、欲がない。

後続 - 逆接: 和也は欲がないが、知ったかぶりをする。

後続 - 順接: 和也は欲がなく、知ったかぶりをする。

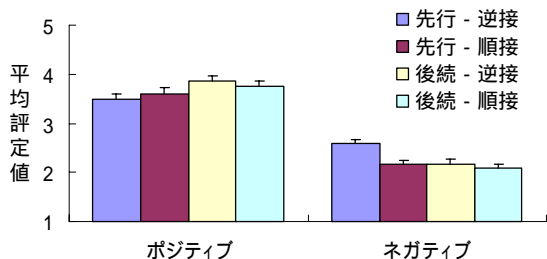


Figure 1 人物の好ましさの平均評定値

本研究の実施に際して、21 世紀 COE プログラム「こころを解明する感性科学の推進」の支援を受けました。

(ISEKI Ryuta & KIKUCHI Tadashi)

この原稿は、日本認知心理学会の許可を得て転載しています。出典は、日本認知心理学会大会発表論文集 (p. 92, 2007 年) になります。